

川の環境

ひとくちに川といっても、淀川のような大きな川から、名前のない水路のような小さな川もあります。また、海に近い下流と山地に近い上流では、そこにすむ生きものにも大きな違いがあります。ここでは川を下流、中流、上流におおきく分けてみましょう。

下流

川の下流域としてすぐに思いつく淀川は、日本でも有数の大きな川ですが、その流域が大都市のまんなかを流れているため、堰や護岸工事など人の手が多く加わっています。それでも、広い河川敷の草地やヨシ原、それに淀川特有の「わんど」(P. 24参照)の存在などによって、まだまだ多くの生きものがすんでいます。

淀川の水源である琵琶湖を含めた琵琶湖淀川水系は、日本で最も淡水魚貝類の豊富な水系です。淀川の本流でも、イタセンパラとアユモドキの2種類の天然記念物の魚を含めて、多くの生きものがすんでいます。淀川の名前がついたヨドシロヘリハンミョウは、残念ながらここでは絶滅してしまいましたが、下流域のヨシ原にはヒヌマイトトンボという大変珍しい昆虫がまだすんでいます。また、ヨシ原はオオヨシキリやヨシゴイ、オオジュリン、ツリスガラなどの鳥たちのすみかとしても重要です。

淀川や大和川など大きな水面をもつ川は、水鳥たちにとっても重要な生活場所として利用されています。夏にはコアジサシが飛びかい、冬にはオナガガモやキンクロハジロ、ホシハジロなどのカモ類をはじめ、ユリカモメやカンムリカイツブリなども多くみることができます。河川敷の草地では、ハタネズミなどを狙って、チュウヒやコミミズクなどの冬鳥が訪れることもあります。

河川敷にはたくさんの植物が生えていますが、セイタカアワダチソウやセイヨウカラシナなど外国から新しく入ってきた植物(帰化植物)が増えてきています。

これは、都市部を流れる川の特徴でもあります。